

# イラン考古学の新境地寸描

大津忠彦

A Brief Sketch of New Developments in the Iranian Archaeology

Tadahiko OHTSU

## はじめに

筆者は1990年より1996年まで継続の、ほぼイラン全土にわたる遺跡概観踏査、ならびに1997、98両年におけるギーラーン州当局と共同しての同州内踏査（大津・岡野 2000）を、中近東文化センターの研究事業の一環としてこれまで行ってきた。ただしこれらの現地調査活動は、イラン全土の文化財関連事業を中央集権的につかさどる政府機関「イラン文化遺産庁」（Iranian Cultural Heritage Organization、以下 ICHO）の正式許諾無しであったため、残念ながら活動上様々の制約や不具合を伴った。それらの打開策を模索しつつ、イラン当局への折衝を継続していたところ幸いにも、2001年6月、中近東文化センターと ICHOとのあいだに、イランにおける考古学研究調査に関する「協定書（合意書）」が正式発効し今日に及んでいる。ここに至る関係各位、機関の尽力の一端については、すでに拙稿に著したところがある（大津 2002）。

イラン往来の度に、とりわけ欧米の各調査隊がかつて成果を挙げていた遺跡を訪れる度に、それらを手掛けた研究者の再訪、調査再開の如何が関心事となったものだが、イランにおける新たな「外国隊」の胎動、ならびにイラン・イスラーム革命（1979年）前の「外国隊」を視座に据えたイラン側の調査活動のいくつかに今あらためて注目すべきところがあるようと思われる。はやくも成果内容のすでに紹介された事例から、ここにその概略二、三をとりあげてみたい。

## ドイツ・イラン共同調査団によるアリスマン遺跡の調査

イラン・イスラーム共和国政府によって1985年1月に創設された ICHO が、外国の研究機関と正規の協定を取り交わし、遺跡の共同調査に着手することになったその相手国第1号はドイツであった。すなわち2000年4～5月、アリスマン遺跡においてドイツ・イラン共同調査団の第1シーズンが実施されたのである。ドイツははやくも1990年代当初より、地質、鉱物、冶金学分野においてイラン関係当局と共同した研究活動を開始しており、この取り組みの発展延長上に「アリスマン・プロジェクト」はあるとみなければならない。

テヘラーンの南約240km にナタンズがある。ここはイラ

ン中央沙漠（ダシュテ・カヴィール）のほとんど西縁辺部にあたり、アリスマン遺跡はこのナタンズの東10km に位置する。この地域から北西に位置するカーシャーン、さらには南東のナーイーンから沙漠中をタバスへ至る一帯はイランにおける鉱物、冶金学上ならびに金属史研究において重要である。いまではすっかりカーシャーンの市街地内に位置するほどまでにその周辺環境が変わってしまったシアルク遺跡（Tappe Sialk）しかし。当遺跡出土の金属器原材料は、北西50km ほどのヴェシュナヴェ鉱山址や、あるいはナーイーン北東のアナラクやタル・メスィと考えられてきた研究史がある。なお、ナタンズの西約100km にあるムーテには、もともと鉄産地ながら、1993年よりオーストラリアの技術協力で稼動を開始した金生産プラントがあり、筆者が訪れた1996年2月現在、トンあたり2～5g の含有量鉱石から月産30kg の金を生産しているところである。

アリスマン遺跡調査概報（Chegini et al. 2000）によれば、同遺跡は1996年の紹介、翌年の ICHO による試掘を経て、2000年の調査第1シーズン開始に至った。数ヘクタールに及ぶ遺跡全域で「シアルクIII期」、「シアルクIV期」の表採資料を認め、調査区I～IIIのうち、最大規模のそして銅生産に関わる様相を示唆する調査区Iにトレント（A1、B1、C1）が穿たれた。それぞれ、トレント A1はスラグの山や、少なくとも33回の再構築を示す溶融製錬炉の存在から「シアルクIV期」の銅製錬システム、トレント B1は3基の土器窯やピゼ壁の建築遺構を含み持つ2.2m の文化層の深堀りによって「シアルクIII期」の最終段階（Sialk III6-7b）に帰属するセトゥルメント域（マウンド）、そしてトレント C1は「シアルクIV期」の墓、セトゥルメント域と捉えられている。

なお、アリスマン調査区IIでは「恐らく紀元前2千年紀末に年代付けられる特徴的な灰色土器」に言及されているが、アリスマン調査区I～IIIの編年的、機能的相関について報告者は今後の課題としている。

アリスマン遺跡の調査成果は今後、とりわけ「シアルクIII期」から「シアルクIV期」にかけての諸問題をあらたな調査資料のもとに再考可能にするための重要な端緒を提供とするはずである。遺跡の位置するところは、前述のごと

く、イラン中央高原における冶金史研究の要衝でもある。イラン高原最古の銅製品のひとつに数えられるシアルク遺跡北丘 I - 3 層出土品の位置付けや、東方のパルドシール近郊タル・イ・イブリース遺跡やシャフダード近郊タッペ・ルート遺跡など、これまでに紀元前 5 ~ 3 千年紀の銅製鍊址としてその重要性が報告された事例の再検討にも資することとなろう。

#### Sialk Reconsideration Project によるシアルク遺跡の調査

前記アリスマン遺跡の項で頻出のシアルク遺跡が、イラン中央高原の重要な標準遺跡であることは改めて言うまでもない。R. ギルシュマン (Ghirshman 1895-1979年) は、1933年より1938年まで3シーズンにわたる都合12ヶ月余の調査期間中、ふたつの遺丘すなわち北丘 (320m × 110m、周囲との比高 6 m)、南丘 (260m × 190m、周囲との比高 6 m) および遺丘南側、北側平地部分にある「墓域 A、B」を発掘した結果、ここに 5 期すなわち「シアルク I ~ V 期」を設定したのである。近年、あらためてこのシアルク遺跡についての再検討が、イラン人研究者の手によって開始され興味深い成果が表されてきている。

2001年1月に、M. シャーミルザディ (Shahmirzadi) によって創設、組織された「シアルク再考プロジェクト」(Sialk Reconsideration Project = SRP) は翌年1月に第1次現地調査に着手。このたびその概報が刊行された (Shahmirzadi 2002)。

SRP の調査目的として報告書は 5 項目を列挙しているが、この重要遺跡の修復保存がつよく意図されていることは明らかだ。たしかに、筆者が 13 年前に訪れた時に目撃した遺跡裾部の簡易「サッカー場」とそのすぐ脇の残廃盛土の山はすっかり撤去され、今ではそこに出土品の展示施設を兼ね備えた現場事務所と、そして遺跡見学路が整備されている。ギルシュマンの調査から 70 年経過し、すっかり様相をかえてしまった遺跡の再調査は新たな地形図作成、旧発掘区の位置確認からスタートした。そして北丘と南丘との間に新たなトレンチが設定され、シアルク遺跡の層序再検討のためギルシュマンの発掘区のセクション再調査が行われたのである。その結果、地山に至る 39 層が確認された。これらのうち、ギルシュマンのいう Sialk III 1 - 3 期に相当する第 39 ~ 29 層からは大量の銅スラグ片が出土。同種の遺物は新たな発掘調査区 (Test Trench A) の同時期層 (第 39 ~ 38 層相当) からも検出された。

シアルク遺跡の層位についてはかつて革命前の 1970 年に、テヘラーン大学がカズヴィーン南のガブレスタン遺跡 (Tepe Ghabristan) を調査した成果に照らして、改めてギルシュマンによるシアルク調査報告内容をみてみると、そこにはどうも時期ごとの遺物分類に混乱がみられるよう

だとの批判が提唱されて以来の問題にさかのぼる (Majidzadeh 1978, 1981)。その後の研究進展についてあるいは筆者の看過があるかもしれないが、かねてより指摘の、たとえば、“the precise assignment of pottery to the individual layers of period Sialk III at Sialk in many cases appears uncertain in the publications” (Majidzadeh 1978, p. 94)について、やっと実質的な検証に着手されはじめたとみなすべきであろう。

SRP の調査では、北丘と南丘とのあいだにおける古代の河床の検出、分析試料としての 22kg にのぼる獣骨やフリンント、チャートさらには黒曜石や石英を含む新石器時代石器などがあらたな成果として確認されたばかりではない。シャーミルザディは南丘調査成果としてここに、泥レンガ (35cm × 35cm × 15cm サイズ) で構築された 3 段からなる「ジッグラト」を見出したと報告している。それは 56m × 45m の基壇部、35m × 35m の第 2 段目、および第 2 段目より小さい第 3 段目から成り、各段の高さは 4 m を測る。共伴遺物の土器や焼成レンガにみられる印影などから、「ジッグラト」の帰属年代は原文字期後半 (原エラム期=紀元前 2900 ~ 2500 年) とされた。これが真正「ジッグラト」とすれば、その時代的古さ、あるいはイラン中央高原に位置すること等々について、あらたな課題の提起となろう。

「Sialk III」の土器再検討、イラン中央高原における冶金史、建築史についてなど、また先述のアリスマン遺跡と関連して、シアルク遺跡がいまあらためて問い合わせ直されている。その課題内容もさることながら、シャーミルザディの指揮下にあって、これらに実質取り組んでいるイラン人研究者がいずれも 20 歳代後半から 30 歳代と若人であることは留意されるべきであろう。すなわち、イラン・イスラーム革命後の新世代が考古学部門でもいよいよ第一線で活躍するようになったのである。

#### 日本・イラン共同調査団によるセフィードルード川流域の遺跡調査

中近東文化センターは 2001 年 6 月の「協定書 (合意書)」締結後、同年 8 ~ 9 月、イラン文化遺産庁との共同考古学調査 (第 1 次) を開始した。その対象域を、アルボルズ山脈を横切ってカスピ海に注ぐセフィードルード川流域 (ギーラーン州) に選定したのは、既知の遺跡、考古学情報がイラン鉄器時代以降、しかもそれらのほとんどが古墓に限定されるという特異性に対する疑問からの出発であった (大津 1998, 2001; 大津・岡野 2000)。したがって遺跡踏査を入念に敢行し、その成果として第 2 次調査 (2002 年 8 ~ 9 月) 終了現在で 88 地点について、それらを基礎データ化することができた。踏査遺跡のうちには、集落址、「遺丘」、岩陰など、これまで当該地域では不詳であった種類も含ま

れる（大津 2003）。また、それぞれの遺跡立地の地勢を合わせ考察すると、遺跡相互間に有機的結びつきが想定されるようになってきた（山内 2003；Ohtsu 2003）。

2002年度からは、踏査と並行して、ジャラリイエ・タッペ遺跡（Tappe Jalaliye）の発掘調査にも着手した。イラン・イスラーム革命後のイランにおける外国隊による正規の考古学調査としては、先述のアリスマン遺跡におけるドイツによる調査事例に次いで2件目、日本調査隊としては23年ぶりであった。ここでは調査の意義についてあらためて述べておきたい。

多年ギーラーン州で分布調査を継続し、近年とくにタレシュのアーグエヴレルにおける数次にわたる継続調査をこの度概報したハラトバリの成果が象徴するように（Khalatbari 2003）、当該地域の考古資料は古墓副葬品にそれらの出自がほとんど限定される。ために、考古遺物のセット関係は明瞭ながら、編年に関わる先後関係や、変遷様態については、特定の器物（たとえば青銅利器）に依って他地域と比較するという手法に頼らざるを得ない。つまり、もっとも普遍的でしかも層序関係の明確な土器資料に基づいた考古学的文化編年体系は未解明のままである。また、今回の分布調査では当然多くの遺跡地点を確認すると共に表採資料を集めたものの、それらの帰属年代を判定するための基準がなく、おおまかに鉄器、パルティア／サーサーン、イスラームの各時期に大別するのが精々という現況である。したがって、ジャラリイエ・タッペ遺跡の発掘資料こそは編年構築の好資料と期待できるはずである。それは、踏査による表採資料にとってばかりではなく、既存の博物館資料研究にも資するところがある。というのも、日本をふくめて、世界の主要博物館や美術館が所蔵するイラン出自の美術・工芸・考古資料のうちカスピ海南岸域からとされるものは数多い。1950、60年代に、「アムラシュ物」として大量の器物が取り引きされたからである。周知のごとく、アムラシュがそうした「盗掘品」の集散地であり、実際の出土はデイラマーンあるいはジャラリイエ・タッペ遺跡周辺域の古墓と判明しているので、ジャラリイエ・タッペ遺跡の発掘資料は、より正当な年代観を博物館資料に付加し得る社会的意義もあるであろう。

ギーラーン州はこれまで、古墳出土資料が相似することから、正倉院伝世品あるいはまた伝安閑天皇陵（羽曳野市）出土といわれる「瑠璃碗」のシルクロードを介した西方の故地として、我が国の考古学界ではとくに1960年代より注目されてきた。イラン・イスラーム革命前、東京大学調査団の目的のひとつ「東亜及び日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究」ではまさにこの地域を研究対象とし、成果をおさめた。日本を含む東西交渉史の要衝について、いまあらためてその歴史的背景を研究することはイラ

ン・イスラーム革命を機に「イスラーム」に偏重した嫌いのあるイラン理解に再考を促す具体的一助となるであろう。これはまた別の社会的意義かもしれない。

イランにおける考古学研究はイラン・イスラーム革命や、その後勃発したイラン・イラク戦争（1980～88年）等による国内混迷の後遺症として、資料操作法の学問的、技術的未熟さ、調査成果公開の不十分さが如実に見られる。セフィードルード川流域（ギーラーン州）における共同調査によって、日本の精緻な考古学資料操作法が伝授されることは必須の要件であるという状況下、これもまた我が国がイランに対し具体的に貢献できる分野であると考えるのは関係者のひとりとしての過剰な意気込みであろうか。

日本に対しては、欧米諸外国以上に大きい期待がイラン当局にはある。そして、調査成果自体についてはもちろんのこと、対等の「共同調査」であることへの強いこだわりがある。つまり、お互いの信頼関係が確立されなければならないことは当然ながら、調査研究成果への全過程が相補完的な「共同調査」であるべきなのである。そこには、イランにかぎらず中近東諸国において、これまで自国の文化遺産が欧米によって搾取されるがままであったという払拭しがたい外国不信がいまもって根強いことと同時に、独特のナショナリズムと相俟って、かつての考古学調査成果が調査する外国側に殆ど独占され、中近東側当事国（研究向上に資すること極めて小であったとの國辱的苦々しさがあるのも事実なのである（Abidi 2001）。

「共同調査団」にとって、調査活動における役割、経費等の公平な分担、調査成果すべての共有そして公表（単年度ごとの「報告書」作成やテヘラーンにおける成果発表会（＝セミナー）開催）の義務などは忠実に履行るべき重要事項となっており、「日本・イラン共同調査団」のギーラーン調査は今後の共同調査への試金石であると認識する。たしかに、見切り発車を余儀無くされたところや相互協力関係をこのさきどこまで拡大維持できるか未知数部分が大きいことは確かである。

### 注視すべき「外国隊」の動静

近年イランでは、国家プロジェクト規模の一般調査、発掘、修復保存活動が本格化するとともに、革命後久しく途絶していた外国との共同調査再開が模索されはじめ、近年それは実現のはこびとなっている。ドイツは先述のごとくアリスマン遺跡の発掘調査を文化遺産庁と共同して開始したが、アメリカの研究機関もイラン文化遺産庁の協力をうけて、シカゴ大学オリエント研究所（アメリカ）がファーレス北西部で一般調査（1995年3月）、スシアナにて発掘調査（1996年9月）を行った経緯がある。中近東文化センターもこの新たな動向に従ったわけである。日本がイランで考

古学調査に着手することに対する一部イラン当局関係者の期待は大きく、たとえば広島大学が革命前に行ったゴルガーン平原調査については、これが再開されることについて期待を明確にしているほどである。

イラン文化遺産庁関係者からの情報提供によれば新たな「共同調査」として、オーストラリアは正規の協定書を締結終了し、2003年1月より、ファールスにおいてエラム期遺跡の発掘調査に着手した由。ほかにイタリア、フランス、イギリスおよびアメリカの別隊によるイラン遺跡調査参画の予定も取り沙汰されていると聞く。このように考古学研究部門では、現政権の標榜する「解放・自由化路線」は確かに進展しているかに見られるが、今またどうして、先の革命によって排斥したはずの「外国」なのかと異を唱える守旧派勢力が依然根強いこともどうやら事実のようである。不安材料がないわけではなく、十分に注視すべきであろう。

#### 参考文献

- Abidi, K. 2001 Nationalism, Politics, and the Development of Archaeology in Iran. *American Journal of Archaeology* 105/1: 51-76.  
Chegini, N. N. et al. 2000 Preliminary Report on Archaeometallurgical Investigations around the Prehistoric Site of Arisman near Kashan, Western Central Iran. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 32: 281-318.  
Khalatbari, M. R. 2003 *Tool Talesh: Excavation at Gilan 1998*

- 2003. Teheran, Iranian Cultural Heritage Organization.  
Majidzadeh, Y. 1978 Correction of the Internal Chronology for the Sialk III Period on the Basis of the Pottery Sequence at Tepe Ghabristan. *Iran* 16: 93-101.  
Majidzadeh, Y. 1981 Sialk III and the Pottery Sequence at Tepe Ghabristan. *Iran* 19: 141-146.  
Ohtsu, T. (ed.) 2003 *Archaeological Survey in Northwestern Iran: Report on the General Survey in Gilan and Its Surrounding Areas*. Tokyo, Middle Eastern Culture Center in Japan.  
Shahmirzadi, S. M. 2002 *The Ziggurat of Sialk*. Iranian Cultural Heritage Organization, Deputy for Research, Archaeological Research Center, Report No. 1. Teheran, Iranian Cultural Heritage Organization.  
大津忠彦 1998 「ギーラーン州の古代遺跡」中近東文化センター編『ギーラーン 緑なすもう一つのイラン』41-46頁。  
大津忠彦 2001 「ターレシュ／アルボルズ山系（イラン）の先史遺跡—鉄器時代以前へのアプローチー」『オリエント』44巻1号 145-156頁。  
大津忠彦 2002 「イラン踏査覚書（20）付記、イラン遺跡調査再開—「日本・イラン共同調査団」発足とギーラーン州遺跡踏査—」『chashm』No. 114 15-23頁。  
大津忠彦 2003 「2002年度イラン遺跡調査—「日本・イラン共同調査団」によるセフィードルード川流域（ギーラーン州）における考古学調査—」日本西アジア考古学会編『平成14年度 今よみがえる古代オリエント』第10回西アジア発掘調査報告会報告集 51-56頁。  
大津忠彦・岡野智彦編 2000 『ギーラーン踏査—1997, 1998年度イラン遺跡踏査の記録—』中近東文化センター。  
山内和也 2003 「キャルーラズ谷の歴史の再建」2002年2月25日イラン文化遺産庁におけるセミナー発表要旨。

大津忠彦  
中近東文化センター・帝京平成大学  
Tadahiko OHTSU  
*The Middle Eastern Culture Center in Japan; Teikyo Heisei University*